

哲學研究

第七十二號

第七卷
第三册

朱子の禮說

浦川源吾

支那哲學史上朱子の占むる地位に就いては今更畷畷を要しない、彼が經學史上後來に及ぼした影響も頗る多大であるが、日本の舊來の學者は多く朱子の形而上學倫理學の方面に偏して研究した觀があつて、彼の經學上の功績に就いて詳しく説いて居ないやうである、斯る點から朱子の學問の全體系を理解せんとするに當り自分は先づ經學の方面から朱子の業績を窺ひ然る後形而上學說、倫理說其他の者に及ぼうと志した。斯くすることは一面に於て朱子の學問の傳統をも明にすることが出来ると思つたからでもある、且此の企圖を實行するに刺戟を與へたことは此より前に

朱子の尙書に關する所説を窺つて其の卓識炯眼に推服したことである。尙書に關する研究は清朝に入つて先づ閻若璩が「古文尙書疏證」を著はして舊來の研究を殆んど根柢から覆したことに始まり續々と考證學的研究が行はれ孫星衍、段玉裁、惠棟、皮錫瑞等の述作を出し、餘す處無き迄に進んだ清朝の尙書研究の草分けと見做すべきは閻若璩であるが若璩に大なる暗示を與へた者は朱子である。就中朱子が尙書の大序小序を文章の格調の上より漢人の作でなく六朝人の作であらうと推定し古文と稱せらるゝものが却つて讀み易く、今文と言はるゝものが之に反して讀み難いのを疑つた點は若璩の尙書研究の上の偉大な貢獻である眞古文と僞古文との鑑別に大なる寄與をなして居る。清朝の經學者の多くは宋代の儒者は空理を談ずる弊に墮して、實事求是を顧みないと非難するけれども此の非難は恐らく朱子には當らないであらう、且宗儒の長所は經書の通論にあつて其の點は微細な考證校勘に没頭する清朝の經學者の到底及ばない所である、朱子が通論に非常に秀でて居るとは前の尙書研究の功績に見ても明である。斯る所より自分は今、經學上重要な地位を占むる禮の學問に關する朱子の所説を檢覈して見やうと思ふのであるが朱子の禮の學問に就いて述べるならば、少くとも(一)朱子の觀念したる禮の意義、(二)儒教の經典である

三禮に關する研究、(三)朱子の制作せんとせる禮は如何なる用意を以てせられ、又制作したる禮は如何なるものかの諸點に就いて述べなければならぬ、經學を經書の學問と觀念すれば、第二項が最も重要問題である、然し現今の自分の研究の程度にては之を紹介することは出来ても批判することは困難であるにより、此の項に就いて述べるのを他日に譲り、第一項と第二項の一部分とに就いて以下に少しく述べて見たいと思ふ。

二

論語の學而篇の「禮の用は、和を貴しと爲す」その有子の言葉に朱子は注釋をなして「禮なる者は天理の節文、人事の儀則なり」と言ひ、論語の爲政篇の「生之に事ふるに禮を以てし、死之を葬むるに禮を以てし、之を祭るに禮を以てす」その孔子の語の朱注には「禮は即ち理の節文なり」とある。其他、顏淵篇、學而篇等にも同様の注釋が施こされて居る。節文とは品節文章のことで、更に詳しく言へば曲折、厚簿、淺深の差等があり、自然のまゝのものに洗練を加へてあることである。天理とは朱子の形而上學の根本概念である、太極と言ふ言葉とも同じである、太極即天理とは宇宙萬物の根源で、獨立

自存のもの、完全圓滿にして始めなく終りなき根本實在である、全ての物は皆天理を有し、天理は全ての物に内存する。然らば天理は如何にして禮に現はるゝと朱子は考へたか、朱子語類の葉賀孫の録する一節に尙書堯典の「天有典を叙し我五典を自ふ五ながら敦くせよや、天有禮を秩し我五禮を自ふ五ながら庸ひよや」の句を引き其下に「這箇の典禮は自ら是天理の當然、他に一毫を缺ぎ得ず他に一毫を添へ得ず。惟是聖人の心は天と合一す、故に這の禮を行ひ出し一も天理と合はざるなし、其間曲折厚簿淺深、恰好ならざるなし、這は都て是れ聖人自ら撰出するにあらず、都て是れ天理決定し著して此の如かるべし。後人此の心聖人の心に似るを得ず、只聖人の已に行へる底、聖人の後世に傳ふる所の底を將て、這の様子に従つて做す、做し得て合ふ時便ち是天理の自然に合す」とある。即天理は圓滿完全にして一毫をも添減するを得ない、禮も亦圓滿完全のもので一毫をも加減することが出来ない。人間の中の最も秀れた聖人の心は天理と合一するにより禮を行へば一として天理に合一せないものはない、聖人が禮を行ふ時には其間に曲折厚簿淺深の差別即品節があり皆妥當である。此は聖人の心も圓滿完全であるからであらふ。禮は聖人自ら作り出したものでなく聖人の心の本體をなす天理が已に此の如く決定してあるのである。後世の人は

聖人と同じ心を有することが出来ず天理を全く身に體しないから先世の聖人の已に行つた迹、聖人の後世に傳へたものを模範として行ふが其の模範に巧に合致することが出来た時には天理の自然に合することが出来る。要するに禮は天理の顯現であるが此が普通の人間の認識の對象となり、實行を指導する契機となり得るのは理想的人格者たる聖人を仲介とし聖人は自己の任意の意志に従つて禮を作り出すのではなく自己の本體である天理を外的活動として自然に發現し、其の活動は全く天理に由つて規定せられて居る。普通の人間は聖人と同じ心を有することが出来ない、只聖人の外的活動として著はしたものを又は記録せられたものを模倣するのみである。然し聖人の模範に完全に遵從すれば天理に合一することが出来る、人間の目的は出来得る限り天理に近づき天理を體することである。言葉を換へて言へば本然の性を發現し悟得することである、従つて禮を忠實に履行することは人間の目的を達することにもなる。朱子は或場合には聖人が禮を制作することを言つて居るが其は如上の所説から見ると聖人の任意の制作と見倣すべきではあるまい。禮の制作と聖人との關係について朱子と荀子との間に可成の差異がある。荀子は禮論篇に「人間は生れて欲がある、欲して得られないと求めるに至る、求めて度量分界

(制限)がないと争(他人と)はざるを得ないやうになる、争へば亂が生じ、亂が生ずれば窮する、先王は亂を惡むが故に禮義を制作して之を分ち人の欲を養ひ人の求めを給し、欲をして物を窮めないやうに、物をして欲に屈せないやうにし、兩者を相持して生せしむる是が禮の起る所以であるとの意味を述べて居る。個人の欲望の無制限な満足追求は社會の他の人々の欲望の満足を阻害することになり、欲望の對象が無限でないから利害の衝突を來し争亂を惹起するに至る故に先王は個人の欲望を全く無視せず或制限の下に出來る丈の満足を與へ欲望と對象との適當なる平衡を得しむるために禮を制作したと考へた。先王とは換言すれば聖人である。此に由つて之を觀れば荀子は禮を聖人の人間救濟の動機より任意に制作したものとし制作に重きを置いて居るが朱子は更に制作の與に天理の決定を認めて形而上學的に説明して居る。朱子は禮を天理の節文と定義したが節文の文字は孟子の離婁章句上の「禮の實は斯の二者事親、從兄を節文する是なり」の句及禮記の坊記に「禮なる者は人情に因つて之が節文をなし以て民の坊となす」の句の中に見え、程伊川も禮は人情によつて節文をなせるものと考へて居たのであるから朱子によつて始められた解釋と云ふことは出來ぬ。

朱子は本體論宇宙論に於て理と氣との對立を説き人生論に於て性と情との對立を説いた、然し時としては理と性と、氣と情とを同一に見て居る場合もある、而して理と氣、性と情との間に本末精粗、完不完、の差別を説いた。性情の對立に於て禮は何れに屬すると朱子は考へたらうか、孟子の公孫丑章句上の「惻隱の心は仁の端なり、羞惡の心は義の端なり、辭讓の心は禮の端なり、是非の心は智の端」の朱注に「惻隱、羞惡、辭讓、是非は情なり、仁義禮智は性なり、心は性情を統ぶる者なり、端は緒なり、其の情の發するに因つて性の本然、得て見るべし、猶ほ物内に在つて緒の外に見はるゝが如し」と説明して居る。即禮は性で、辭讓は情である、心とは性と情とを概括したものである、端は緒(糸口)である、情の發現によつて性の本然を認めることが出来るが性は本であり完全なものであるが情は末で不完全なものである、普通常識では辭讓を禮と考へるが其は禮の末であり、發現したる不完全のものである。端の解釋従つて性と情との關係の見方は趙岐や伊藤仁齋等は朱子と異つて居る、此等の人々は端の字は本と同じ意味で惻隱、羞惡、辭讓、是非は仁義禮智の根本であると考へ、性と情、心と端との間に

朱子の如き價値の差別を認めて居ない、孟子の思想の忠實正確な解釋としては寧ろ常識的に見た古義家の解釋を信すべきであらう。之を朱子自身の思想の説述と見れば解釋の當不當は別問題として興味を覺えるものである。然し茲に注意すべきは朱子は禮と辭讓との關係を性と情との關係とした見方を普遍的に適用せず他の場合には常識的な見方に妥協して居ることである。論語の泰伯篇の「詩に興り、禮に立ち、樂に成る」との孔子の言葉を解釋するに「禮は恭敬辭遜を以て本となし節文度數の詳あり」と言つて居るが恭敬辭遜と辭讓とは同じことであるから朱子も亦辭讓を禮の本と考へたと思はねばならぬ、さすれば仁齋等の見方と一致すると言へやう、考へやうによつては此の不徹底は朱子が孟子を解釋する場合と論語を注解する場合とに態度を異にし孟子には哲學的に論語には常識的に説明しやうとしたところから來たとも言へ、強いて尤めるに及ばないかも知れないが、彼此の間に不徹底なる適用のあることは否定出來ない。孔子は論語の爲政篇に「之を導くに徳を以てし、之を齊ふるに禮を以てす」と言つた。此は禮のみが人間生活の唯一普通の原理でなく、禮は他の原理と並立するものと見たのであらう、其後の儒者も多くは此の見解を持つて居つた。然らば朱子は如何に見たか、今之を前掲の爲政篇の文の集注に就いて見る

に「愚謂へらく、政なる者は治を爲すの具、刑なる者は治を輔くるの徳、徳禮は則ち治を出す所以の本、徳は又禮の本なり、此其れ終始を相爲す也、偏廢すべからずと雖も然かも政刑は民をして罪を遠ざからしむるのみ、徳禮の效は則ち民をして日々善に遷つて自ら知らざらしむ、故に民を治むる者は徒らに其の末を恃むべからず、當に其の本を深く探るべし」と言ひ、又政は法制禁令であり、政の言は正であつて人の不正を正す所以である、徳の言は得である、道を行つて心に得る有るものと言つて居る、即政も徳も禮も共に人間生活に缺ぐべからざるも皆相俟つて始めて人間の完全なる生活を遂げ得るものであるが、政刑は人間が悪い行爲をなした時に之を矯正し或は豫め罰を與へることを想はせて悪い行爲を爲さないやうに防止するもので消極的なものである、徳と禮とは人間をして善なる行爲をなさしむる積極的なものである、政刑は末で徳禮は本である。更に徳と禮とについて言へば徳は本で禮は末である。然し此の場合の本末は前後の意味で先にすべきもの後に行ふべきものを區別したのであらう。

古來、禮の解釋として禮は履なりいふものがあつた、禮も履も共に音が「レ」であるところから爲された支那の學者の言葉の定義に用ふる普通の仕方に従つたものであ

る、履といふことは「行爲することである、朱子は禮は天理の發現して品節文章のあるものと言へると同時に人事の儀則なりと言つた、人事の儀則とは人間の外面的生活の模範標準と言ふ意味である、然るに語類の葉賀孫に語つた所にては普通の人間は聖人の行爲した迹に従つて行ふと言つて居るから普通の人間は聖人の示した人間の外面的生活の模範標準に従つて行ふべきである、故に禮を踏み行ふ、或は法則に従つて行爲する意味から履なりと言ふならば首肯し得る、朱子文集の「講禮記序説」の首に「熹之を聞く、博く學んで先王六藝の文を守り誦して以て其の辭を識り講じて以て其の意に通じて之を約する無ければ學にあらざるなり、故に曰く博く學んで詳に之を説くは將に以て約を説くに反らんとするなりと、何をか約と謂ふ禮是也、禮とは履なり昔の誦して説けるものは是に至つて踐んで履むべきを謂ふなり故に夫子曰く君子は博く文に學んで之を約するに禮を以てすと顔子の夫子を稱するにも亦曰く我を博むるに文を以てし我を約するに禮を以てすと禮の義たる其れ大ならざらんや」と述べて居る、學問の目的は單に該博な知識を得るに止まらず之を禮によつて統一し實行することにあつて此の意味から禮は實行と云へるのである。然し禮は履なりとの説明は朱子に始まつたのではない、朱子の學問に直接大なる影響を與へた

程伊川も禮は履なりと言つて居るし更に古くは後漢の許慎が説文解字の禮の字の解釋に於て言つて居る、されど説明の仕方なり内容なりは許慎と朱子との間に非常な差異がある、許慎の説明は禮の原始的の意味を表はして居て興味深いものであるから煩冗を顧みず次に述べて見やう、説文に「禮は履なり神に事へ福を致す所以なり示に从ひ豊に从ふ」とあり更に示と豊とにつき「示は垂るゝ象、吉凶を見し人に示す所以なり二に从ふ三垂、日月星なり天文を觀て以て事變を察す神に事ふるを示す」、豊は禮を行ふの器なり、豆に从ふ象」と即物を供へて神に禮拜供養するためのものである、此の説明は古代支那人に取つて宗教的生活が人間生活の極めて重要な部分を占め、儀式と言へば神に禮拜供養するためのものと考へたことを示すものである、紀元前十二三世紀の頃に支那の北方に住した殷代の人民が鬼神を尊び鬼神に事へることを人間の最大の義務と心得、之を怠るは人間の最重の罪惡と見做し、政治や道德の墮落は一に宗教心の墮落より來ると考へたことゝ許慎の説明とを思ひ合はして見ると頗る興味を感ずるのである。要するに朱子の禮の意義の説明は彼の形而上學の根本概念である天理の發現と見た點に前人の未だ試みなかつた深味のあるものと認められるけれども時には舊來の説を其儘繼承して常識の立場に留まつて居たことも

認められる。尙禮を個人の道德的生活の一原理として其の意義を説いては居るが未だ禮を一の社會現象とし見て其の意義と價值とを明に説いて居ないのは物足りない。其の點では荀子の所説の方が興味を惹くのである。

四

聖人は天理を體現して人間の世界に禮を存在せしむるものである、聖人は屢々世の中に出現しない。支那の學者は古代を黄金時代と見、聖人も古代には出現したが其の後は民衆の先覺者としては賢人があるのみと考へた。禮は聖人の行つたもの、その朱子の考へからすれば禮は聖人の出現した時に完成したと見なければならぬ。然らば完成したる禮は其儘其の完全な形態を持続して來たであらうか、天理が圓滿完全であると共に恒久不變なものであるならば其の顯現である禮も恒久不變なものであらうとは論理的に考へられるのであるが朱子は果して如何に考へたであらうか、暫く此の問題に就いて朱子の所説を調べて見やう。朱子文集の「乞修三禮劄子」(三禮とは周禮儀禮禮記に「臣之を聞く六經の道は歸を同じうすれど禮樂の用を急となす、秦の滅學に遭いて禮樂先づ壞る、漢晋以來の諸儒補綴すれど竟に全書なく其の

頗る存する者は三禮のみ周官周禮のことの一書は固より禮の綱領たり其の儀法度
 數に至つては則ち儀禮は乃ち其の本經にして禮記の郊特牲冠義等の篇は乃ち其の
 義說意義を説明せるものとの意なりのみ、此より前猶ほ三禮通禮學究の諸科科擧の
 試驗科目あり禮行はれずと雖も士は猶ほ誦習して其の説を知るを得たり。熙寧以
 來王安石は舊制を變亂し儀禮を廢罷し獨り禮記の科のみを存し經儀禮を指すを棄
 て傳禮記を言ふに任じ本を遺れ末を宗とし其の失已に甚だし博士諸生は又其の虛
 文を誦して應擧受驗に供するに過ぎずと述べ朱子語類に沈問の錄する語の一節に
 は今日は百事人の理會するなし姑く禮を以て之を言へば古禮は既に之を考ふる莫
 し後世の沿革因襲する者に至つても亦浸く其の意を失ひ止に浸く其の意を失ふの
 みに非ず名物度數に至つても曉る者あるなく差舛譌謬して着眼に堪へずとあり、
 又朱子文集の跋三家禮範程伊川張橫渠司馬溫公に嗚呼禮の廢るゝこと久し矣士大
 夫幼にして身に習はず是を以て長じて家に行ふなく長じて家に行ふなし是を以て
 進んで朝廷に議し郡縣に施こすなく退いて閭里に教へ之を子孫に傳ふるなく其の
 職の修まらざるを知るある莫しと書いて居る。又當時一般の人は一家に大事の起
 つた時禮に就いての知識なきため如何にすべきかを知らず只人情に従つて手厚く

さへすれば禮に適へるものと思惟して居ることを葉賀孫に語つて居る。(朱子語類 葉賀孫錄當時禮は斯の如き情態であると嘆息した朱子は古代は如何なる情態であつたと思つたか、語類の葉賀孫に語つたものに「古人は上下習熟し家々に至り戸々に曉すを待たず、皆飢えて食ひ渴して飲むが如く略々(少し)もの意其の難きを見ず(中略) 古人の其義を講明する所以のものは其儀皆在り其の具並べて存するにより耳に聞き目に見ることは是の禮にあらざるなし所謂三千威儀三百(經)禮は較然として知るべし」とあり。朱子文集の「講禮記序説」の中に「蓋し先王の世には上は朝廷より下は閭巷に達するまで其の儀品に章あり動作に節ありて所謂禮の實なる者は皆踐んで之を履めり矣、故に曰く禮儀三百威儀三千は其人を待つて後行はる即ち豈に必ずしも簡策にして後傳へんや、其後禮廢れ儒者之を惜み乃ち始めて論著して書を作り世に傳ふ」とあり。又別に葉賀孫に語つた言葉の中には「古は禮學は是れ専門に家に名け始め終此事を理解せり故に學者は傳授する所ありて終身守つて之を行ひ、凡そ禮を行はんと欲して疑ふ者あれば輒ちに就いて質問す、上は宗廟朝廷より下は士庶鄉黨に至る迄典禮各々分明なる所以なり漢唐の時猶ほ此の意あり」とある此等を要するに朱子は禮は古代に盛であつて其の當時の人々は禮の意義を充分に理解し、名物度数も

其頃に存在して居たので具體的な知識があり又一方禮の専門家があつて禮に精通して居り普通人が禮に關して疑惑を感じた時は専門家に就いて質問をなし實際に禮を行ふ場合に適切な指導を受くることが出來て居た。然るに秦の暴虐なる政治は儒教の文化を破壊せんとし儒教の經典を焼き學者を抗殺したので禮と樂とは最も其の害を受け散佚するに至つた。漢代になつて古書の蒐集補正が行はれ三禮が世の中に出でたが全書でないため古禮を徹底的に研究することは不可能になつた、然し尙少數の専門家が有り科擧の試験の科目となつて居つたがため受験の志を有する士人に學習せられて居た、王安石が儀禮を試験科目から除去したため禮の研究は益々衰へ今日は一般には禮の素養なく其の爲すところは見るに堪へないと朱子は考へた。上掲の朱子の言葉の中禮書發生の徑路を語つて居る面白い節がある、即ち古代に於ては人々は禮を履み行つて居て必ずしも記録されたものを通じて知つて居たのではなかつた、禮が次第に廢れるので儒者が之を記録して禮書を作るに至つたと言へることは他の儒教の經典の成立と同じく禮も之が記録せらるゝに至つたのは後世のことであると考へたのである。禮は殊に容儀を重んじ其のみを専門に傳へた家のあつたことは史記や漢書の儒林傳に明である、容儀として傳へられて

居る間に時代が變遷して其の意義の不明になりかけたところから其の意義を説く必要が生じて來た。儀禮の士冠禮や士昏禮の終に士冠記や士昏記の附いて居るのは此の事を示すものである、記即ち説明が更に進んで獨立の學問となり専門家を要するに至り禮記のみの専門家が出來たものであらふ。朱子の如上の言葉は禮經成立の研究の上に大なる暗示を與へるものである。朱子は禮の衰微の原因は(一)禮書の散佚したるため古禮を窺知するに困難になつたこと(二)政治上の誤れる政策が禮の實行及研究の發達を阻碍したことに求めて全く外的な事情に由るものとして居る。然し禮の衰微は上掲の外的な原因からばかり來るものでなく其他禮其者の社會生活に對し適應の可能性の有無にも由るであらふ、禮の中社會生活に對し適應の可能性を有するものは永き年代を経ても保存され適應の可能性を缺ぎ只一時に適應するものは時代を経過する間に淘汰される、朱子は禮に變化する部分と變化せざる部分とがあると考へたが其の説は社會生活への適應性の有無などいふ立脚地から立て、居るものでなく獨斷的に本來禮の中に變化する部分と變化せざる部分を想定し主として禮の精神的要素の重要なものに不變性を認め外形的な形式に變化のあるを認めて居るが精神的要素の方面にも變化は免れないであらふと思ふ 朱子

の上の説は論語の爲政篇の孔子の言葉の「殷は夏の禮に因る、損益するところ知るべきなり、周は殷の禮に因る、損益するところ知るべきなり、其れ周に繼ぐものあらば百世と雖も知るべきなり」の註に「三綱五常は禮の大體、三代相繼ぎ皆之に因つて變ずる能はず其の損益する所は文章制度の小過不及の間のみ其の已然の迹今皆見るべし」と説いて居る三綱五常の内容も時代により變化は免れまい、制度文章の過不及の間にのみ變化が行はれ其の已然の迹今皆見るべしと言つて居るが、朱子の見た變化の迹を詳しくあげ其間に窺はれる變化の理法を掲げて呉れて居たらばと思ふ。又禮の變化を促す原因としては經濟生活の變化或は又時代一般の風潮、個人の人生觀の差、異其他多くの原因があらう。朱子が古代を禮にとつては黃金時代と見る考へは古代を憧憬し全て古代を理想的のものと想ふ儒者一般の思想に共通するものであらふ、古代とは年代的に見て何時を指すか、之に對する朱子の説明は明確でないが恐らく周代及其以前の時代を指したものであらふ、周代及其以前の時代に果して禮といふものが朱子の考へて居る如く廣い範圍の社會の人々に充分に理解されて居たであらふか、人間生活の進化といふ點から考へても、又歴史の事實を公平に考へても朱子の言には首肯することが出來ない。

四

聖人は既に過去のものである、聖人の作つた禮は既に多く散佚して了つた。然し禮は人生に取つて必要缺ぐべからざるものとすべからば茲に與へられる課題は散佚せる古禮に就いて其の義理を究め其に従つて禮を改作することであらねばならぬ。然らば朱子は如何なる方法を以て古禮の義理を推明し如何にして改作しやうと考へたか、此の問題に關する朱子の所説を少しく述べて見やうと思ふ。朱子の學問研究法は事々物々の上に就いて其理を究め然る後之を綜合する歸納的のものである禮の研究に於ても朱子は此の歸納的方法を適用しなければならぬと思つた、朱子語類の葉賀孫の録した言葉の一節に「本朝の陸農師名は佃の徒は大抵禮を説くに都て先づ其の義を求めんことを要す豈に知らんや古人の其義を講明する所以のもの蓋し其の儀皆在り其の具並べて存するにより耳に聞き目に見ることは禮にあらざるなし所謂三千、三百は較然として知るべし。故に此に於て其義を論説すれば皆據依あり、今の如きは古禮散佚し百に一二だも存するものなし、如何ぞ懸空に上面に於て義を説かん。甚麼の何の義を説き得む須く是れ且く(しばらく)散失の諸禮

を將て錯綜參考し節文度数をして一々實を着けしむべく方めて其義を推明すべし、若し錯綜し得て實ならば其義も亦説くを待たずして自ら明ならんとある。散失の諸禮を以て錯綜參考して節文度数を一々着實ならしむことが其の眼目である。陸佃の禮の義理を説いたものを見ないから其の如何なるものであるか知り得ない、朱子の語から察すれば陸佃は傳統を無視して現存の禮其者に就き其の意義を究明し批評しやうとしたものゝ如く斯る自由にして拘束されない禮の説き方も一の面白い方法であらふ。只朱子と立場を異にするため茲に非難を受けて居るが全く無意義無價值とすることは出来まい。朱子の歸納的研究法も凡ての事柄を細大漏らさず究盡して然る後目的を達するものとすれば人間の力の果して及び得るか否か疑問であらふ、朱子も歸納的方法を重んじたが必ずしも上言した如くせよとは言はなかつた、寧ろ先づ禮の本領を理解して然る後其餘の枝葉のものに及ぶべきを説いた、若し本領を理會せずして只事の上に就いて理解しやうと要むるならば許多の事を理會し得ても却つて雜亂に陥り統一を缺ぐものである。本領とは何であるか、禮の大原大本に就いて葉賀孫に語つた中に曾子と孟子の言葉を引いて其が大原大本だと言つて居る。曾子の言葉とは曾子が死するに臨んで君子の道に貴ぶところが

三ある「容貌を動かして斯に暴慢に遠かり、顔色を正して斯に信に近づき辭氣を出して斯に鄙倍に遠かる、籩豆の事は有司存す」の他人に接する三つの道が禮の大原大本である。孟子の言葉は孟子が諸侯の禮を問はれた時「諸侯の禮は吾未だ之を學ばざるなり、吾嘗つて之を聞けり三年の喪、齊疏の服、餼粥の食は天子より庶人に達す」と答へたものが夫である。曾子の言葉は他人に接する禮の大原であり孟子の語は喪の時子の行ふべき禮の大本である、即禮の本領とは禮全體としての根本的意義又は特殊の禮の意義を指すのである。禮の研究をなす場合には先づ此の根本的意義の理解が第一義のものであるが之を認識する方法は説いて居ない、恐らく此は直覺的に認識し得ると考へたであらふ。朱子は大體禮の研究法に就いて上の如く述べた序に禮經に關する古人の註疏を讀む場合に注意しなければならぬこととして「漢儒の注書を見るに通せざる處に於ては即ち説き道ふ這は是れ夏商の制と、大抵且つ頼し將ち去らんことを要す」(誤魔化し去らうとするの意)を葉賀孫に教へて居る。此は炯眼な思ひ付きで朱子の經書研究の非凡なことを證するものである、實際禮記及注を讀むときに著しく目につくことは此の事である、其の説は何處迄正しいかは嘗つて疑つたことである、朱子の此の注意は古人の注疏を見る時新らしい見方を教示する

ものである。

朱子自身は禮を研究する時如何なる書によつたか、又其書の價值に就いて如何に觀念して居つたか、朱子が禮を研究するに第一に三禮によつたことは言ふ迄もない、三禮に就いて如何に考へて居たかは此の論文に於て述べることを避け後日に譲り其他の朝廷に於て或は私人の手によつて作られた禮及禮書に關する朱子の見解を掲げやう、叔孫通（漢初の人）の制する漢儀、高祖の命により作る事は史記の叔孫通の傳及禮書にあり、及曹褒（後漢の人）の修むるところ、章帝の命により修むは固より古にあらず然も亦今存せず、唐に開元、顯慶の二禮あり、高宗の顯慶三年太尉趙國公長孫無忌等新禮を修めて成る凡そ一百三十卷二百五十九篇、詔して天下に頒つ事は唐書の高宗本紀及禮儀志に載せらる、玄宗の開元二十年中書令蕭嵩等開元新禮一百五十卷を奏上す所司に制して之を行はしむ事は唐書の玄宗本紀及禮儀志にあり、顯慶は已に亡び開元は隋の舊を襲うて之を爲る、宋太祖開寶禮を修む多くは開元に本づき頗る詳備を加ふ、政和、徽宗の間に五禮を修む一時の姦邪私智を以て損益し疏略牴牾更に理解することなし、開寶に如かずと沈僞に語つたが之によつて朱子以前朝廷の手にて編纂された禮書の傳統を知ることが出來言外に其の價值をも窺ふことが出来る。

朱子が私人の手に編纂された禮書で參考して居たものは程氏のものど張横渠のものど司馬溫公のもので就中司馬溫公のものには非常に敬服し彼自身禮を修むる時多く之に據つたやうである。今其のことを朱子の言葉に由つて窺へば横渠の制する禮は多く儀禮に本づかず自ら杜撰の處あり溫公の如きは却つて儀禮に本づき最も古今の宜に適へり^一二程と横渠とは多く是古禮なり溫公は則ち大概儀禮に本づき參するに今の行ふべきものを以てす要するに溫公較や穩なり^二伊川の禮は祭祀に用ふべし婚禮は溫公のもの好し^三と黃義剛に語り。禮の意を問ふ甚だよし願ふるに淺陋なれば何ぞ議するに足らん此の舊と遵守する所の者は溫公の書儀程氏の新禮のみ兩書は想ふに皆之を見て其の善なるものを選べば可なり^四と朱子文集の方耕道に與へた書の一節にあるもの及程張の言猶ほ頗る具はらず獨り司馬氏成書を爲る^五成書とは完成したる書の謂と跋三家禮範に説いてある。司馬溫公の書儀は今日存して居るにより就いて見ることが出来る。

朱子は禮を改作する意が強かつた、現に朱子の制作した禮が傳はつて居る。朱子語類に載せられてある家禮及單行の文公家禮が夫であると言はれて居るが四庫全書總目提要には文公家禮は朱子の自撰したものでない^六と考證して居る。されば之

を語類と併せ考へて合ふところを取れば間違はなからふ。朱子の制作した家禮は朱子以後に大なる影響を與へ元典章の禮の部を見れば禮儀は文公の制したる家禮によるべしと規定してあり明代清代の會典に採録されてある士禮も殆んど文公のものに類して居る、又清初の學者黃宗羲も其著「明夷待訪錄」の學校の條に禮儀は一に文公の制作したものを遵奉すべきを言て居る位で士大夫の間に廣く用ゐられたらうと思はれる。文公の家禮が儀禮のものど如何に異り、又司馬溫公の家儀ど如何に異なるかは支那文化の變遷を研究する上に興味ある題目である。自分は嘗つて文公の家禮の婚禮が如何に儀禮及司馬公の家儀と異なるかは研究して見たが未だ全般に亘つて研究して居らぬから茲には略する。朱子が禮を作るに當つて最も多く參考したものは司馬溫公の家儀である、前に司馬溫公の家儀に對する朱子の觀察と批評とは述べた今更に「跋三家禮範」の一節を見るに「熹嘗つて司馬氏の書により諸家の説を參考し裁訂増損して綱を擧げ目を張り云云」と書いて居るのを見れば改作の時如何に影響を受けたかは測られる。然し朱子は禮を制作する時古禮を如何に取扱はうと思つたかを見るに沈僩に古禮に全く従ふ意はない古禮は繁冗で今日之を行ふは不可能である禮は時勢に適するのを大なりとなすのであるから今の禮により裁

酌して其の簡易にして曉り易く行ふべきを取る意味のことを語り李方子、黃義剛、吳必大にも同じ意味を語つて居る此等を見れば禮の制作に當つての朱子の用意を觀ることが出来る。聖人が天理を體現して制作した禮が何故時代を経ることにより行はれない部分を生じたか、天理は時處を超越したものでないのであるか、それとも時代に由つて其の發現の仕方が異なるのであるか、朱子がこれ等について述べてあつたらばと思ふ。

五

禮を制作するのは單に虚文を存するためではない、之を實際に社會一般に履行さして社會生活を改良しやうとするものであることは古來からの學者の等しく考へたところである。朱子は實行の可能につき又實行せしめる方法につき如何に考へたか、普通の人は司馬溫公の書儀を見て中に記載してある禮を行はうと思はないのは之を行ふに廣い堂室を要し多くの給使(人)盛なる儀物(物)を備へねばならぬにより到底力が及ばぬと思ふからであるが此は禮書の文は元來多いは多いが身親ら試むれば頃刻の間に終ることが出来る、其物は博いが然し禮は足らなくとも恭が餘りあれ

ば可なることを知らないところから來る誤解であつて實行の可能なものであると「跋三家禮範」に言つて居る。實行の方法については朱子文集の「君臣禮議」に詳しく述べてある、今其の主旨を述べる、禮は上(朝廷及王室)に行ふことは困難ではないが下(士大夫及民庶一般)に行はうことは困難である其の理由は朝廷の上には典章が明に具はつて居り又尙書省には禮部尙書侍郎より以下郎吏に至る迄數十人の官吏が居り又太常寺には卿、小卿以下博士掌故に至る迄數十人ある。何か事があれば故事を按じて行ひ此の數十人の者が聚つて之を謀り、其の器物幣帛牲牢酒醴に於ては之を共し之を受くるに皆常制がある其の降登して事を執る人は其の容節に習熟し違失しない且つ一度不當があれば諫官や御史が古今を援據して之を質正する此が所謂上に行はれ難くないことである。地方の州縣の間で士大夫庶民の家で禮を已むを得ず行はんとすれば困難な事情がある、其の困難な理由には五つある、第一は現今上下の共に承用して居るものは徽宗皇帝の時に制作した政和の五禮であつて其書は嘗つて天下に班布したが律令と共に理官の間に藏せられ一切の俗吏は其説を知ることが出來ず民に長たる者も適當の時期に宣布して民間に通せしむることが出來ず甚だしい者になると其者をも併せて亡つて居る、第二は幸に禮書を存して居る者も

上下一般に相承けて習用することが苟簡なために平時之を習ふものがなく何か事
 があれば急に之を學ぶところから設張に誤りが多く朝廷も之を監督糾正すること
 がない、第三は祭器は嘗つて政和の改制の時盡く古器物の當時に残存して居る者を
 取つて法とした今の郊(天を祀る)廟(祖先を祭る)に用ふるものは其の制である。然る
 に州縣では専ら聶崇義の三禮圖の制度を取つて居るが醜怪不經で古制と言へない、
 第四は州縣では只三獻官のみに祭服があつて其の分獻執事陪位の者は皆常服を着
 けて居る、古(祭服を指す)今(常服を指す)が雜揉し雅(祭服)俗(常服)の區別がなく縣邑では
 直だ常服を用ゐて禮典に應はない、第五は政和の五禮の書は當時修纂が多人數の手
 にかゝつたので其間に前後矛盾し疎略不備の箇處があるので其の記載してあるこ
 とに盡く従ふは困難である。以上の五點が禮の上下合はない理由である、若し之を
 改正しやうとすれば次の五つの方法を以てせなければならぬ、第一は禮の朝廷で施
 こされて居るものは地方の州縣の士民は與り知ることが出來ず、盡く之を頒てば傳
 ふる者は多いのに苦しみ習ふ者は博きを患へ能く窮むるものがない、故に州縣の官
 民の用ふべき者を取り近代の制を參照して別に纂録を加へ、紹興纂次政和民臣禮略
 と號して之を印刷して天下の州縣に分ち、州縣では各々三通を作り一は守令の廳事

(役所)に置き一は學校に置き一は名山寺觀に置き皆之を積に藏め守視司察を詔書の如くし、一般人民の用ふる所は州縣で自ら印刷し、正月に摹して市井村落に掲示し之を通知せしむれば永久に行ひ得る、第二に禮書を既に班つたならば次に州縣で土人の中の篤厚で禮を好む者を選んで其説を講誦せしめ頒たれた禮を習はし更に州縣で各々若干人を、官費生として學校に入學さし、治禮と名け事を行ふときに教へるやうにし又は監司の提學使の如き者に詔して其の奉行して居るものが法の通りでないものを察して之を繩治させる、第三には祭器に統一がなく又郡縣で用ふる所が廣多であるにより朝廷より支給するは困難である但事ある毎に一を支給して準式とし之を州郡に付して太守の廳事に積藏させ其の制で爲つたものを州縣に支給し、支給したるものは別の庫に藏し特別に主典を置き守令が到れば其の罷擧を監督し之を印紙に書し其事を丁重にする、第四は祭服は政和の五禮に準じ州縣の三獻分獻執事陪位の服は有無を議して之を補ひ古禮服を作り製造及頒降の法を祭器と同様にする、第五は禮の不備な點は更に詳しく考へて之を正し圖を作り書と共に班つこと、の五つの方法を擧げて居る考へは頗る詳密であるが政治的權力を以て強制する傾がある。禮の實行を道德的行爲の一と見るならば道德に於ては自己の内なる超越

的自我の命令に従つて行爲する自律的なる生活が眞に尊ぶべきものであらう然るを強制的に人民の自由意志をも拘束して之を實行せしめんとするのは自覺なき人民を相手としては意味のあることであらうが其他のものには苦痛であらう。

以上朱子の禮に關する所説の概略を述べたが三禮の研究及朱子自ら制作した家禮の如何なるものであるかは研究の不充分なために此の小論文に於て述べることを避けたが更に後日進んで此等の問題に就いて論述しやうと思ふ。(二月十日)